

岐阜県古川小学校における ふしづくりの教育の理念と指導法の特徴

— 山崎俊宏の著書及び研究報告の検討をとおして —

三村真弓

(2013年10月3日受理)

The Characteristics of Concept and Teaching Method of 'Fushizukuri Education' in Furukawa Elementary School in Gifu Prefecture: Through the Analysis of Book and Study Reports Written by Toshihiro Yamasaki.

Mayumi Mimura

Abstract: 'Fushizukuri Education' is known as a great music education in Japan after the war. It was practiced in Furukawa Elementary School in Gifu Prefecture from the late 1960's to the early 1970's. This education was continued more than 10 years and was highly appreciated nationwide. Behind these brilliant successes, there were mainly two reasons. The one is the introduction of the educational philosophy by the principal, Ichiro Nakaya and the other is a great deal of effort of all teachers at the school including the chief music teacher Toshihiro Yamasaki.

This study examined book and study reports which were written by Yamasaki. The concept of 'Fushizukuri Education' in Furukawa Elementary School was that all teachers are responsible to raise all children. The aim of this education was not only to teach music, but also to form the personal character through voluntary music activities. The characteristics of its teaching method are as follows: Basic musical abilities can be naturally developed by using double teaching methods ('Fushizukuri Education' curriculum and course materials study); Motivation for learning can be increased through the creative activity of 'Fushizukuri'; Aim to enhance personal character formation through 'Fushizukuri' activity as a group activity; Various musical signals are used in the music lessons; Information about music can be acquired by listening to music and imitating to sing songs and play instruments as teacher and/or children do; and creative activities can be seen as a result of all these effects.

Key words: 'Fushizukuri Education', Furukawa Elementary School, Toshihiro Yamasaki
キーワード: ふしづくりの教育, 古川小学校, 山崎俊宏

I はじめに

昭和30年代は、文部省、日本教職員組合、民間団体ともに、学校における音楽教育の改善に力を尽くし始めた時代であった。同時に、地方においても音楽教育

改善の動きが見られるようになった。岐阜県においても同様である。昭和36年に岐阜県教育委員会指導主事となった山本弘は、研究指定校依頼に奔走した。山本の依頼を受け、昭和30年代末から40年代初めにかけて、郡上郡高山小学校、揖斐郡温知小学校、恵那郡大井小

学校において、ふしづくりの教育が試みられた。そして、昭和41年度から岐阜県の研究指定校となった吉城郡古川小学校において、ふしづくりの教育は完成され、「ふしづくり一本道」¹⁾と呼ばれるようになった。昭和40年代後半には、全国から多数の参観者が古川小学校を訪れるようになり、「ふしづくり一本道」のカリキュラムは、山本の著書²⁾で紹介され、高い評価を得た。

「ふしづくり一本道」に関する主な先行研究には、河口(1991)³⁾、木村(1993)⁴⁾、澁谷(1996)⁵⁾、八木(2004)⁶⁾、佐橋(2006)⁷⁾、松永(2006)⁸⁾、松永(2007)⁹⁾、松永(2008)¹⁰⁾、井上(2008)¹¹⁾、菅(2008)¹²⁾等がある。これらのほとんどは、山本の著書・論文及び古川小学校が昭和50年に出版した『ふしづくりの教育—主体的で楽しい音楽教育の実現をめざして十年—』¹³⁾をもとにした研究である。しかし、山本の著書は、研究指定校での実践をもとに書かれた理論書である。また、古川小学校の著書は、ふしづくりの教育に最初から関わり完成していく過程を最もよく知っていた音楽主任の山崎俊宏が異動になったのちに書かれており、ふしづくりの教育をどのようにしてつくりあげていったのか、成立の過程にはどのような教育観が存在したのかということが明らかにされてはいない。一方、澁谷の研究は、貴重な第一次史料と山本弘へのインタビューをもとに、主として「ふしづくり一本道」成立までの経緯を明らかにしているが、古川小学校のふしづくりの教育の内容までは検討していない。

本研究者は、これまでに、岐阜県古川小学校で行われたふしづくりの教育に影響を与えた重要人物に焦点をあてて研究を行ってきた。その結果、古川小学校の「ふしづくり一本道」を作り上げたのは山本であるという通説に対して、昭和10年代から岐阜県高山市で中村好明が行っていた音楽教育改善の試みが、ふしづくりの教育の基盤になっている可能性が高いことが明らかとなった¹⁴⁾ ¹⁵⁾ ¹⁶⁾。また、古川小学校でのふしづくりの教育成立にあたっては中家一郎校長の教育観が大きく影響を与えたこと、またふしづくりの教育が長きにわたって続いたのも中家校長の功績であったことがわかった¹⁷⁾ ¹⁸⁾。さらに、古川小学校でのふしづくりの教育に実際に携わった人たちへのインタビュー調査を行った結果、古川小学校のふしづくりのカリキュラムを試行錯誤しながら作成し、実践をとおして改善していったのは、山崎を初めとする古川小学校の全教員であったことも明らかとなった。山崎は昭和48年に、音楽主任として関わったふしづくりの教育の7年間の研究成果を、子どものたくさんの作品とともに『ほんものの音楽教育を求めて』¹⁹⁾に著している。また山崎は、古川小学校在職中に、音楽主任として古川小学校の研

究発表大会や拡大参観日において研究発表をし、また中家校長とともに招聘された全国各地での講演においても研究報告を行っており、その手書き原稿が多く現存している。そこで本研究では、山崎の著書及び研究報告(研究発表手書き原稿)を検討することによって、古川小学校におけるふしづくりの教育の理念と指導法の特徴を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 古川小学校長中家一郎及び音楽科主任山崎俊宏の略歴

中家一郎は、現在の飛騨市古川町の生まれである。古川尋常高等小学校に学んだ中家は、昭和4年に15歳で岐阜師範学校に入学し、同9年に同校を卒業し、高山南尋常高等小学校に赴任した。昭和11年には教職をいったん辞し、岐阜師範学校専攻科に入学した。翌12年には専攻科を修了し、高山西尋常高等小学校に赴任している。昭和17年には、古川国民学校に転勤し、10年間を同校で勤務した。昭和27年には、国府中学校に教頭として転勤し、昭和29年から2年間は飛騨教育事務所指導主事を務めた。中家は、昭和31年に国府村立老和気(おいわけ)小学校長に、昭和36年に角川小中学校長に、昭和37年に河合中学校長となった。

その後中家は、昭和38年に飛騨教育事務所指導課長に転出している。昭和41年度の岐阜県の小学校音楽科の研究指定校が古川小学校に決定したのも、当時飛騨教育事務所の課長であった中家が、岐阜県の指導主事であった山本の相談を受け、自らの母校である古川小学校を推薦したからである。中家は、昭和42年には、自らが母校古川小学校の校長となり、学校運営に絶大な手腕を発揮した。そして、一貫してふしづくりの教育を支え、その発展に大きく貢献した。中家は、いくつかの栄転の話もすべて断って、最後まで古川小学校長の職にとどまり、昭和50年3月に教職から退いた。

一方山崎俊宏は、昭和4年に現在の高山市国府町にて誕生し、岐阜県の教員養成所を卒業したのち、日本大学文理学部2年課程を修了し、さらに武蔵野音楽大学で聴講生として音楽を2年学んだ。昭和26年に大村小学校に赴任し、昭和29年には宇津江小学校に異動になり、昭和37年から古川小学校に赴任した。昭和41年に古川小学校が研究指定を受けた当時は、音楽の専科教師はおらず、山崎音楽主任が中心となって、ふしづくりの教育の実践を推進した。

山崎は、昭和49年に飛騨教育事務所音楽指導主事となり、昭和51年には、再び古川小学校へ教頭として赴任した。

山崎は、昭和52年10月に、ふしづくりの教育に対す

る長年の功績を評価されて、第8回中日教育賞²⁰⁾「ふしづくり音楽教育の推進」を受賞している。彼は、昭和54年から、本郷中学校、神岡中学校、国府中学校において教頭を歴任し、昭和62年3月に定年退職した。その後山崎は、平成元年から平成4年まで、国府町教育委員長を務めた。

Ⅲ 古川小学校におけるふしづくりの教育の研究経過

昭和41年度から昭和49年度にいたる10年間の古川小学校の研究経緯は以下である。

表1 昭和41年度～49年度の古川小学校の研究経過²¹⁾

S. 41 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県教委研究指定校「創造性の開発をめざした「ふしづくり一本道」の実践」 ・ 授業構造の研究（ふしづくりと教材の扱い方研究） ・ 感覚優先についての研究 ・ 学級経営についての研究（各教科指導方針と生活指導） ・ 学習の個別化の研究（グループ指導） ・ 県教科研第11回県音研究大会「楽しさの中に美しさと確かさを求めて」 ・ 古城郡小中学校研究授業、研究演奏公開「ふしづくりを通じた音楽指導の系統化」 ・ 創作曲集「草ぶえ」 ・ ふしづくり指導段階表第一次案作成
S. 42 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導法の研究（主体性、創造性のある授業研究） ・ 校内体制の確立（学級担任全教科指導） ・ ふしづくり指導段階表第二次案作成（低・中・高学年用の三本案を作成） ・ ふしづくり指導段階表第三次案作成 ・ 県教委指定研究発表「主体性、創造性のある授業構造—ふしづくり一本道の実践をとおして—」（参観者400名）
S. 43 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究課題（指導要領改正点の研究、全教科の教育課程研究） ・ ふしづくり指導段階表第四次案作成 ・ 音楽参観者169名
S. 44 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究教科「国語」（主体的、創造的な学習態度の育成） ・ ふしづくり指導段階表第四次案実践研究 ・ 「和声と3拍子」系統試案作成
S. 45 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽参観者357名 ・ 研究教科「国語」 ・ ふしづくり指導段階表第四次案実践研究 ・ 「和声と3拍子」の実践研究 ・ 鍵盤ハーモニカ研究実践 ・ 音楽参観者365名
S. 46 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究教科「算数」「音楽」 ・ ふしづくり指導段階表第五次案作成 ・ 全国自主発表「ふしづくり実践」開催10月（参観者1,100名） ・ 拡大参観日2月（参観者550名） ・ 本年度音楽参観者1,990名、内地留学8名

S. 47 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究教科「算数」「音楽」 ・ 拡大参観日6月（参加者550名）、10月（参加者1,000名） ・ 実技講習7月（参観者113名） ・ ふしづくり指導書作成
S. 48 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本年度音楽参観者2,382名、内地留学5名 ・ 研究教科「算数」「音楽」 ・ 参観日5月（参観者75名）、6月（参観者387名）、9月（参観者28名）、11月（参観者50名）、2月（参観者230名） ・ 拡大参観日10月（参観者950名） ・ ふしづくり講習会7月（県内参観者62名、県外参観者143名） ・ シンガポール文部省教育視察団来校8名 ・ NHKテレビ全国放送 教育テレビ「教師の時間」 ・ 本年度音楽参観者2,002名、内地留学6名
S. 49 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究教科「算数」「音楽」 ・ 参観日5月（参観者55名）、6月（参観者450名）、11月（参観者350名）、2月（参観者500名） ・ 拡大参観日10月（参観者1,700名） ・ ふしづくり講習会7月（参観者165名） ・ 『ふしづくりの教育』発刊（3月） ・ 本年度参観者2,898名、内地留学7名

県の研究指定校であった2年間の成果は、昭和43年2月の研究会で「主体性、創造性のある授業構造—ふしづくり一本道の実践をとおして—」として発表され、この時点でふしづくり指導段階表第三次案が作成されている。同じように県の研究指定校を受けていた高山小学校、温知小学校、大井小学校は2年間の研究指定が終了したあとはふしづくりの教育を行っていないが、古川小学校は、研究指定校としての2年間が終了したのちも、引き続きふしづくりの教育のカリキュラム改訂を継続している。昭和43年度にはふしづくり指導段階表第四次案を作成し、昭和44年度には「和声と3拍子」の系統試案を作成、昭和45年度には鍵盤ハーモニカを全国に先駆けて実践に取り入れている。この鍵盤ハーモニカの導入は、ふしづくりの教育にとって、非常に大きな成果をもたらした。昭和46年度にはふしづくり指導段階表第五次案が作成され、これをもってカリキュラムが完成したと言える。昭和43年度からの3年間は研究発表会がなかったものの、音楽の参観者は169名から365名へと増加し、中家校長は翌年の昭和46年度から全国自主発表会、拡大参加日等の開催を決意した。それ以来、音楽の参観者は、昭和46年度で1,990名、昭和47年度で2,382名、昭和48年度で2,002名、昭和49年度で2,898名となり、古川小学校のふしづくりの教育は全国的に有名となった。昭和50年3月、中家校長の退職を機に、古川小学校は10年間の研究成果として、『ふしづくりの教育—主体的で楽しい音楽教育の実現をめざして十年—』を発刊した。

中家校長退職後、昭和50年度から3年間は山下一男校長が「ふしづくりの教育」を引き継いだ。しかし、昭和53年度に赴任したZ校長は、その最初の訓示で、「私は「ふしづくりの教育」を潰しに来た。」と発言した。Z校長は、1年ごとに1/3の教員を異動させ、3年間で、ふしづくりの教育に関係していた教員ほぼ全員を古川小学校から転出させたとされている。こうして、「ふしづくりの教育」は消滅していったのである。倉庫に保管されていた「ふしづくりの教育」の資料もすべて焼却されたそうである。

IV 山崎俊宏の著書及び研究・実践報告に見られるふしづくりの教育の理念と指導法

1 ふしづくりの教育のはじまりと様相

山崎は、県の研究指定校を引き受けた昭和41年度のことを振り返って次のように述べている。

音楽という教科に対する考え方が特殊なものであり、一部の堪能なる教師が指導すべきものであるという通念があった。しかし乍ら指定校の主旨からいっても、一部の教師ばかりでなく、全部の先生が、みんなの子どもを育てるべきであるという、ねがいに立ち、受けることになった。

目の前が真暗な状態であり、何をどうしていくべきなのか、ほとほと困ってしまっただけで、先進校の温知小、大井小の視察、学年の体制づくり、初めて授業を持たれた先生方は、「伴奏がひけないから困る」と、いわれたので教材の伴奏をテープに録音したり、先生が、子どもの前に立ちふさがった授業にならないようにするためのくふう、一人一人をみつめ能力を開発していくための手段として「グループ学習は音楽では可能でないのか。」(一中略一) わたしの信念である感覚優先の音楽授業のあり方…と幾多の問題点があったが、ともかく手をつけたのが、ふしづくりの実践である。1年から6年まで「ふしづくり」は同時に出発した。しかし先生方から「教材」と「ふしづくり」の二本立てでどうしても、教材がおくれるがどうしたものか。また、音楽委員会から「こうやれというレベルを示してほしい」と、いう声があり、研究会のたびに出され、何とかしなければと苦しい思いをした。誰も歩んだ事のない道を切り開いて行く過程なのだ。教師だけのプラン(机上プラン)ではいけないので子どもと共に歩み乍らの研究なのではかどらない。しかし県から田中一昭先生、山本弘先生、事務局より、中村先生、山下両先生、毎月一回本校の職員と同じようなお気持ちで御指導をいただきました。(一中略一)

約半年も過ぎた頃、2、3年の先生から「うちのクラスの子どもの音楽に対する構えが変わって来た。」「教材を覚えるのに早くなった。」「笛やハーモニカをうまく吹くようになった。」「楽しんで音楽をする子が多くなって来た」、などという声がかかるようになった。(一中略一) お互いに「この方向でいんだ」ということがわかり、指導の先生が前から話されていたことが、どの先生にも理解してもらえるようになったと嬉しかった。(一中略一) 技能面での心配や発声、演奏技能という問題がよく話題になったが、今は音楽の骨組みを作っているんだからという考えで、あまり表現面には力を入れず、とにかく教材は、うたをおぼえること、すきな速さで、すきな強弱増減でうたいこなす事に終始した。

二学期の終わる頃になり、どうしても模唱奏の段階前にリズムにのせる段が必要ではなからうか、〇〇〇Vというリズム

ムにのって、いろいろな遊びを通してつかませる事、流れに鋭敏に反応することが、もともになると考えた。そこで導入段階ということで、模唱奏の前に、いくつかの段階を作った。遊びを通して活動する子どもらは、生き生きとした姿であり、特に低学年では、ことばを覚えていくのと同じように、模倣、選択、即興、再表現と、くりかえすいろいろな遊びの中で体験し、つみ上げていく事がだいじだと思った。そこに主体性も創造性も育ち得る源があると痛感した。

ふしづくりの教育が、常に子ども達を選択、責任のある立場においこんで自分も活動しなくてはならないので活動量も多くなる。したがって能力としても定着してくる。するとおもしろくなる。このくりかえしで、毎日の内容が積み上げられていく。当然のことであり乍ら従来の音楽教育では考えつかなかったことである。(一中略一) これは机上のプランではなく、実践した内容、年間の時数の中で扱えるもの、どこの学校でも始めて実践する時に使えるもので誰にでもできるものとしてまとめたものである。(一中略一) 中家校長が、よく語っておられることばに、「教育とは、ひとりひとりの子どもを持っている無限の可能性を、ひっぱり出して育てることである…そのためには、人間尊重を基盤においた暖かい民主的な学級経営の上にこそ主体的な学習が成り立つものであると…。」(山崎, pp. 1-4)

古川小学校では、全教員で子ども全員を育てるという信念のもと、校長を中心として全教員がスクラムを組んで、学校全体が大きな目標に向かって動いていた。研究授業や発表演奏を参観した先生たちの感想から、当時の古川小学校の様子がよくわかる。

「教師の音量、高さ、タイミングが実に計算されている。そうした配慮に「一言も聞きもらすまい」とする子どもの姿を招来している。」「音楽学習そのものが音楽的な拍の流れに完全にのっていった。しかも、おとなも及ばぬほどの表情豊かな子どもの指揮にまで発展している。特定の子どものみだけでなく、厳しゅうで、その子の全責任のもとに音楽がきびしく作りあげられていた。教師も完全にその指揮下に属し、子どもと共に音楽にひたり音楽美を追求する姿であった。」「冒頭に数名の子どもたちの範奏があった。既成の文化遺産を伝授するという姿勢でなく、音楽しようとする心の喚起であろうか、案内学習から脱した発見の学習でもあった。それはやむにやまれぬ学習意欲に発展するのであった。学習の計画も教師共々に精選されて立案されたという。」「これが教育だ…と涙した。全員の子どもが、みんなの教師によって育てられ、自分の音楽を力一ぱい、ひとりひとりが、堂々と発表した。これまでに全員が授業をして、全員で演奏した例は他にあったらうか。1000人以上の観衆を惹きつけてしまった。」「演奏には、小アンサンブル、独唱、重唱奏、合唱奏とあらゆる形態で、その上親子のアンサンブルまであり、生活化のようすがうかがわれた。聴きながら、「グググッ」と胸に来て、どうすることもできなかった。周囲の先生方も、涙を一ぱいためた人、ハンカチで目を押さえている人、中にはボロボロと涙を流して泣くように見ておられた方もあった。このような情景が今までの研究会であったらうか? 「これが本当の教育だ、と初めて知らされました。」「児童の構えが学習に立ちむかい、自主的な態度にあふれ、美しい助け合いの精神に満ち満ちていた。学校全体が清潔感に満ち、ちり一つおちていない。子どもたちの親しみある態度、あいさつしてくれた子どもたちの表情、ぬぎずられたスリッパを並べていた女の子たち、静かな廊下歩行、演奏に出入りする姿の整然としたこと、学校全体にゆきとどいていた。」(山崎, pp. 273-275)

2 ふしづくりの教育の理念

山崎は、ふしづくりの教育6年目の研究発表において、次のような視点で音楽教育の体質改善を試みたことを述べている。

真の音楽教育（研究発表手書き原稿より）

子どもの面：子どもたちは、生き生きとした姿であったかどうか、ひとりひとりが十分活動していたかどうか、自分の音楽を持っていたかどうか
 教師：先生みんなで、みんなの子どもを育てたいものだ、6年間のカリキュラムの責任を果たして、次へ引き継いでいるかどうか、だれにでもできる具体案はどうするとよいか
 学校として：転任や組替えがあってもいっこうに差し支えがないかどうか、音楽教育のみにのぼせていないかどうか、いつでも研究授業ができるか

「音楽科における人間形成とは何であるか」（研究発表手書き原稿より）

感動とは与えるものでなくて、感得するものであります。しかも、それは順次深まっていくもので、能力段階で得ていくのであるから、この能力が育たないと深まりはないのである。だから1人1人の能力を開発することこそ人間教育の基盤であると考えます。1人1人の個性や能力を教師がはっきりと把握し、1時間1時間を大切に、充実感を持たせ、子どもの持っている可能性を引っ張り出すことが教育であります。人間尊重を基盤においた、暖かい民主的な学級経営の上に立て、1人でも疎外されない教科指導にあたるべきであると思います。

これらの考えをもとにした理念は、以下である。

1. 習う音楽教育でなく、学び取る音楽教育でありたい（主体的学習の確立、1人1人を伸ばす指導）
 - ・新しい歌を習うのが音楽の時間ではない。
 - ・音楽の時間は先生中心から児童中心へ
 - ・能力の低いものでもがんばれる内容であること
 - ・一斉学習だけでなく、1人1人の学習の場の設定
 - ・学習のめあてや方法がはっきりしていること
 - ・1人学習、友だち学習ができるものでありたい。
 2. 技術主義からの脱却
 - ・いつも歌ったり、弾いたり、上手、下手だけでないこと
 - ・特別な子のみの時間でないこと
 - ・音楽する力を育てたい
 - ・教材より子どもを重視し、楽しみをもたせたい
 3. 系統的に能力の育つ教育でありたい。
 4. 感覚重視の指導でありたい
 - ・感覚優先で、演奏して楽しむ時間でありたい
 5. 担任による指導
 - ・みんなの子をみんなの先生で育てたい
 6. 楽しい学習でありたい。
- 以上をめざしたふしづくりの教育こそ、基礎的な能力を、子ども自ら主体的に学習しながら育てていくの

に最も効果的であり、誰でもができる方法であると山崎は述べている。

山崎のいうふしづくりの教育の特徴は以下である。

- ①教材を並べただけの教科課程ではなく、「ふしづくり」をもとにして、系統を考えた「ふしづくり一本道」によるものであること
- ②堪能な音楽教師だけに可能な教科課程でなく、誰にでもできるものであること
- ③ふしづくりすることにより、自分の音楽をしながら基礎能力を育て、主体的活動のある音楽学習を進めて能力を積み重ねるように系統立てられていること
 つまり、「ふしづくり」というと、その言葉から何か狭い意味の創作指導のように受け取られるが、決してそういう意味ではなく、終局的には創作まで発展するが、これは音楽の基礎を踏まえた創造活動であり、音楽全領域にわたる、基礎能力を系統的に無理なく育てる方途なのであると山崎は述べている（研究発表手書き原稿より）。

また山崎は、指導の理念として、①生活から学習へ（具体から学習内容の抽出）、②子どもが音楽する（愚作の多作、基本理念）、③転移する能力（ひとり歩きができる）、④指導法（④対比、比較、⑤興味、選択、責任、⑥パターン）を挙げている（山崎、p.283）。

これらの具体的内容は、以下の研究報告に示されている（研究発表手書き原稿より）。

1. 音楽教育が生活に生きるため、習う音楽教育から、使いこなす音楽教育の方法であること。音楽も生活の中で使いこなすことから音楽教育をはじめようとするのであります。
2. 音楽の基礎の系統を教育として生かすため、音楽から考えないで、子どもの成長から考えた方向であること、つまり、いくつかの先行経験、累積経験の上に立てて可能にしておくことであります。
3. 教師が教科書を教えこむ方向から、子どもが生活する中で、主体的に学ぶ、つまり教科書でも学ぶ音楽教育の方向をとっていること。現在の音楽教育では、教師がいない時には成立しないので、「教」だけでなく「育」の方向で、ふしづくりの系統により、生活の中で、子どもが自分から自分の能力を統合して次の能力へ高めていく主体的学習の方向をとっていることであります。
4. 音楽教育の価値を、全体学習中心で教材をいかに美しく表現するのではなく、子ども個々の能力がどれだけ高まったかをねらいとしています。つまり、真の教育は、子どもが独り立ちしたときに、どれだけ能力が育ったかに価値を求めるべきであると考えます。
5. 授業の方向を主体的に、模倣のみの内容から“つくる”という主体的学習へ、この主体性は模倣のみの生活からは永久に生まれません。そこで育てる条件としては、自分が責任をもたされた時、選択を迫られた時、興味のある時。この3つの場に子ども自身が立たされた場合に育つもので、子どもから外部へ働きかける性格のものであると考えます。
6. 義務教育としての音楽教育の確立のため、教師の個人プレー教育から、系統と組織のある、“みんなで育てる教育”へ、他教科が高い水準を示しているのは、一定の能力を身につ

けさせ、次へ引き継ぎ、それが累積されているからであります。音楽ではあまりにも個人プレーが多く、引き継ぎもされず、系統も確立せず、実践が組織化されていないからであります。誰でもできる系統が、“ふしづくり一本道”という具体案であります。

また、実践の結果として、1.基礎的な力が無理なく身につくこと、2.ひとりひとりが楽しく学習でき、能力の開発ができること、3.学習が主体的にでき、豊かな人間性を培うことができるので、他教科への影響も大きいこと、4.鋭敏な感受性が育つため、鑑賞力が身につくこと、5.将来一人歩きができること、が挙げられている。さらに山崎は、「もはやふしづくりの教育は、一方法、一方途でなく、教育の目的であると考えています。」とも述べている（研究発表手書き原稿より）。

3 ふしづくりの教育の指導法

(1) 指導観

山崎は、ふしづくりの教育に関して、「30段階100のステップで、子どもの発達段階に即して、指導過程が盛り込まれていますが、決して無味乾燥な基礎指導、ドリル的なものでなく、楽しい学習の中で、主体的に創造活動ができるようになっていきます。音をこねまわす生活より生まれる作品は愚作ではあっても、多作する中で、自分の音楽を持ち、愛着を感じ、その子が自ら音楽していこうという姿勢をねらっています。」と主張している（研究発表手書き原稿より）。

山崎の定義するふしづくりの教育は以下である。

「ふしづくり一本道の実践—子どもたちの主体性を生かして—」（研究発表手書き原稿より）

“ふしづくり”の教育
子どもひとりひとりの
・主体性（興味、選択、責任）の上に立ち
・自分の持っている能力で動き
・その最高を発揮し
・進歩がわかる
・先行経験の累積ができ
・生活以前の能力が高まり
・生活の中で音楽し
・遊びから入り、生涯の生活に浸透する
教師は
・能力がなくとも、子どもと共に体験すればよい
・誰にでもできるから組織化が可能
・自分が授業の中心でない、相談相手
・授業に圧迫感がない
つくる教育は、教育のすべてを満足させる。

古川小学校で取り組んできたふしづくりの教育は、
1.基礎能力を育てようになっていること
2.先行経験の積み上げがされていること
3.具体より抽象に進む方向であること
4.誰でもができる方法であること
5.主体的に学習が進められる方法であること

ふしづくりが音楽授業の中心となるべき理由として、以下が挙げられている（研究発表手書き原稿より）。

- 第1に、つくる教育こそ、本当の要素が統合されること
- 第2に、つくる教育こそ、真の愛着が生まれること
- 第3に、つくる教育こそ、子どもの能力成長にタッチすること
- 第4に、つくる教育こそ、どの教師でも子どもと共に歩けること
- 第5に、つくる教育こそ、芸術として本来の姿であること

また、ふしづくりの教科課程の特徴は以下である。

ふしづくりの教科課程（研究発表手書き原稿より）

- ①「ふしづくり一本道」は、ふしを作るための系統やドリルだけで作っていない
- ②ふしづくりは、特に低、中学年の基礎指導に重点をおいている
- ③3音、7音をもとにした指導に徹底している。
- ④ふしづくりの基礎能力は、表現能力を支えている
- ⑤ふしづくりは、子どもの主体的活動をいかす場の多い、幅のある一本道である。
- ⑥ふしづくりは、児童の具体的な活動を通して、遊びから音楽の流れにのせ、基礎感覚の育成をねらっている。
- ⑦ふしづくりは、身体表現、歌唱、楽器奏、記譜の活動を通して、拍反応、模奏、模唱力、再現力、即興力、変奏能力、ことばとふしの結びつけなどの能力を伸ばすようにしている。
- ⑧ふしづくりは行き先の見える系統である。

山崎は、ふしづくりの指導の特色として、「低学年から遊びを中心として、楽しさのなかで基礎を順次積み上げていくもので、その学習活動には幅があって能力に関係なく、どんな子どもにも楽しさを味わうことができるもの。学習活動のなかで、自分も一緒に活動できたという満足感があり、主体的に学習できるようになり、子どもたちは音楽の学習を好きになります。」と述べている（研究発表手書き原稿より）。

また山崎は、指導に関して、以下のことが重要であると述べている（研究発表手書き原稿より）。

- ①即興力をつける事が大切であります。反射的に反応できる能力、つまり思考力でなく感覚であって、鋭敏な感受性を育てよう、ねらっています。
- ②選択して使いこなす力が大切です。相手に応じて選択していく能力ですから、丸暗記でなく、リレー唱奏の意図もここにあります。
- ③再表現できる力が必要になってきます。能力として身につけるためにも、いくつか浮かんでも消えてしまつては夢であるので、自分のすきなふしが何回も再現できる力を育てることが大切です。この間に、タンタンタウンというリズムの流れを身体を通してつかませ、たえず流れる音楽をねらいます。これが表現するにも大切な力となってきます。
- ④リズム変奏する力をねらいます。ふしがリズム変奏することによって発展し、数多くのことばになってきます。
- ⑤それを活用する力が大切で、身につけたふしをいろいろ組み合わせることで活用することにより、能力として身につきます。ちょうど、「ことば」が模倣、記憶、選択して使い分ける働きが交錯して豊富になるように、音までも、単に記憶するのみでなく、選択して使い分ける「ふしづくり」の教育によって豊富になっていきます。

これらをまとめると、ふしづくりの活動に必要なものは、即興力、選択力、再表現力、リズム変奏力、活用力となる。(ふしを)即興する—(よいふし・相手に合うふしを)選択する—再表現する(模唱・模奏)—リズムを(即興的に)変奏する—(さまざまなふしやリズムを組み合わせて)活用する、という一連の活動は、ふしづくりのカリキュラムにも、実際の授業例にも明示されている。

(2) 二本立ての授業構成

古川小学校の音楽科授業は、通常の音楽活動とふしづくりの活動の二本立ての授業構成となっている。「ふしづくり一本道」のカリキュラムは、通常の音楽活動(歌唱、器楽、創作、鑑賞)を支える土台、すなわち基礎能力を系統的に段階表にまとめたもので、音楽をつくるという活動を通して、ひとり歩きできる力を育てるものであった。表2は、二本立ての授業構成のパターンの例である。

表2 二本立ての授業パターン例(山崎, pp.282-283)

型	分	活動内容
A	10	既習曲 5曲くらい
	15	歌を覚える(レコードを聞く→イメージの話し合い→歌詞の提示→覚えたら座る→学習のめあてをたてる)
	15	ふしづくり(一本道による)
B	5	既習曲
	10	既習曲
	15	歌い方の工夫(速度、強弱、唱奏法=ひとりで工夫してグループで聞き合い、好きなのをえらぶ)
C	5	ふしづくり(一本道によるアンサンブル)
	5	既習曲
	15	合奏の工夫(リズム伴奏、合唱、合奏)
D	20	ふしづくり(一本道による)
	5	次の時間の計画
	5	既習曲
E	15	合う音さがし(保続音、副旋律、和音)
	20	ふしづくり(一本道による)
	5	既習曲
E	15	既習曲(子どもの計画によりプログラムを作る)
	30	ふしづくり(合唱奏のくふう)

(3) ふしづくりの内容

ふしづくりの教育では、低学年は遊びを中心にした身体表現から入る。そして高学年にいたるまで感覚を優先する。まず耳から入れて身体で感じとらせるのである。「聞いて」—「吹いて」(模奏)—「歌って」(リズム唱、階名唱、歌唱)—「書く」(記譜)という順序で進める。

子どもの感覚は鋭いので、このふしづくり指導の段階をふんでいくと、低学年では、3音や7音のふしを

一度聞いただけで、鍵盤ハーモニカを使ってすぐ模奏できるようになり、また中学年では、教材を2、3回レコードで聞いただけで、すぐ笛などで演奏できるようになり、さらに高学年になれば、楽譜をみて初見演奏ができるようになる、と山崎は述べている(研究発表手書き原稿)。

ふしづくりは、低学年15分、中学年20分、高学年25分をめやすに行う。低学年では、遊びを通してリズム感覚を身体でつかむようにするのが大きなねらいであるが、特に長時間同じ遊びでは飽きてしまうので、多くの遊びを用意しておく必要があるし、間が空くとすぐさわき出すので、音楽を使って授業が流れるようにする工夫が大切である。同じ遊びでも方法をいろいろ変えて実施すると、あきないで楽しく遊ばせることができる。新しい遊びは一斉で扱い、慣れたらグループ、個人としていく。記譜に関しては、書くパターンを作り、♪=60ぐらいの速さで流れるように書く。最初はうまく書けるように時間をかけるが、慣れたら1回に4問ぐらい毎時扱うとよい。答え合わせをできるだけ効率的にして、視奏との結びつきも考えていく。階名唱の指遊び(左手を五線にたとえて、ドレミの位置を知らせる)なども、適当に歌を作ってそれに併せて遊ばせ、既習曲への結びつきも考え、階名と五線の位置もわからせていく(山崎, pp.287-291)。

中学年では、1部形式のふしづくり(1人で)、リズム変奏と拍子変奏、記譜、合う音・合うふしづけの4つの内容が並行して20分間行われる。学習パターンとしては、ふしやリズム変奏のリレー、2人組によるふしづくり、4人以上のグループ学習(各人のふし発表→好きなふし選び→模唱奏→リズム伴奏づけや合う音づけ→グループ作品発表→全員によるアンコール曲選び)などがある(山崎, pp.292-296)。

高学年では、まず1人でふしづくりをし、グループ内で、あるいはクラス内で聴きあって好きなふしを選び、それに合う音(保続音)、合うふし(副旋律)をつけ、合唱奏する(山崎, pp.298-299)。

(4) ミュージックサイン

山崎は、子どもが主体的に活動する条件として、課題が明確で行動の1つ1つがわかっていること、全体の順序が子どもにわかっていることを挙げている。

また、学習をより効果的にするために、言葉のかわりに音楽を使って学習展開を音楽的にすることを提案している。つまり、子どもと好きな曲を選んで、その曲が聞こえたらどのような動作をするかを決め、その曲が終わったら動作も終わる約束をするのである。山崎は、新しい遊びでも、慣れてくれば歌で問いかけて、

答えさせることにより遊び方を覚えることもできるし、それによって聞き分ける能力や即興力が自然に身につくと述べている(山崎, pp.286, 289)。これに関しては、参観者の感想からもその様子がわかる。

参観者の感想「効果的なミュージックサイン」(山崎, p.274)

いっさい号令は聞かれない。形式的なものでなく、あいさつに始まり、ノート、楽器などの準備、かたづけ、それらは、すべて音楽のサインで進められている。したがって、ここでも音に傾倒する真剣なまなざしが生まれてくるのであろう。

(5) 主体的な学習活動

ふしづくりの教育は、以下の事例のように、すべての学習が子どもの主体的活動で行われる。

「教と育」(山崎, p.176)

教室へ行く前から歌声が聞こえてくる。自分たちでプログラムを組んでいる。つまり、学習計画を立てて進めているのである。10分くらい歌ってから、直したいところがあれば、もう一度やり直したり、アンコールがあればもう一度、とにかく好きな歌をじゅうぶん歌って今日の学習に入るのである。係の児童が、予定を話し、最後に「先生、これでいいですか」とくるのである。

「演奏活動を通して」(研究発表手書き原稿より)

教材を学習する中で、子どもたちにできるだけ、創造性が発揮できるような機会と場を与えてやるが必要になってきます。1つの教材をグループで、またひとりひとりがいるいろに表現してみたり、音色をくふうしたり、リズム伴奏をつけてみたりして、最も自分たちが好む表現でまとめていく。「今度は〇〇さんの強弱でうたってみましょう」「〇〇さんの速さで」「〇〇さんのリズム伴奏で」といくつかのものを引き出し、認め合いながら追求していくところに、喜びがあり、自分のものとして表現していくところになるのではないのでしょうか。自ら美の追究していくところに、創造性が育つものと思います。

参観者の感想「生きた基礎資料」(山崎, p.273)

低学年より聴音、模唱奏、階名、記譜、和声と一連の活動がよどみなく意欲的に続けられていた。それがひとり教師のみの評価でなく、小集団による児童相互の評価が力強いはげみとなり、ひとりひとりの心の中に責任と協力が、暖かい友愛の中にしっかりと根をおろしていた。今更ながら、学級経営の大切さに心を打たれた。

6年生のある授業(抜粋)(山崎, p.177)

自分たちの作ったふしをグループで、味わいながら聞き合っていて、発表する学習だった。A君のふしが選ばれた。そのふしを模奏する時になって、B君がどうしてもうまく模奏できない。A君、C君、D君が何回も演奏して教えているが、いつも同じところでつままってできない。「おれの作ったふしは、ちょっとばかしむずかしいから、おまえ、うまく吹けんのや。」「そうや、おれのーばんすきなふしの所がうまくいかんのやな。」そんな会話をしながらふたりの学習が始まった。

B君は首をひねりひねりやっていたが、A君は途中から自分の作ったふしに、合うふしを即興的に作って、それをB君に模奏させた。いよいよそのグループの発表だ、どうするのかと思ってみると、A君は「ぼくのふしが選ばれましたが、みんなとまねぶきをしている途中で、合うふしも作れました。それでB君と一緒に吹いて合奏してみます、よくひびき合うか聞いてください。」と前おきをして、二声で笛のアンサンブルを発表したのである。みんなシーンとして、そのひびきに聞き入っていました。「いやあ…いいひびきやった。」「きょうのアンコール曲にしてみんなでまねぶきして合奏したいなあ。」と口々に言っていた。そしてB君のところへ、どやどやと「合うふし」のまねぶきに集まったのである。B君はうれしそうにみんなに教えていた。この時わたしは、暖かい人間関係、音楽を通しての人間づくりのすばらしさ、教育の根底なるもの大切さを痛感した。

上記のような、お互いに認め合い、助け合って1つものを作り上げる学習は、すでに音楽教育の域を超えた、人間教育である。ふしづくりの授業には、自己存在感・有能感、他者受容感、自己決定感があふれていたといえよう。

V 古川小学校におけるふしづくりの教育の理念と指導法の特徴

山崎らは、子どもをもっとよく知っている担任が音楽科授業を担当することによって、義務教育としての音楽教育の確立がはかれると考えた。しかも、単に音楽をどう指導するかという観点よりも、音楽でどう子どもを育てるかという、つまり人間形成を基盤としての教科経営に重点を置いていたのである。

この考え方の背景には、中家校長の教育観が存在する。音楽科授業を、音楽専科教師あるいは音楽の得意な教師が担当するのではなく、たとえ音楽が不得手でも学級担任が担当すべきであるという彼の強固な主張に顕著に表れている。なぜなら、信頼関係のある学級担任だからこそ、子どもの個性や能力や心情を真に理解することができ、そのことによって主体的な学習態度を育成することができ、また主体的な活動をとおして充実感や達成感を引き出すことができるからである。これは音楽科授業にかかわらず、全教科をとおして子どもの人間形成を達成しようとする中家の教育観によるものである²²⁾。当時の音楽主任であった山崎は、古川小学校で「ふしづくりの教育」がうまくいったのは、音楽専科教師が居なかったからであり、学級担任が担当することによって、教師主導の音楽科授業になり得なかったことが大きいと述べている²³⁾。つまり、音楽の得意でない学級担任だからこそ、子どもの目線に立って、子どもとともに暗中模索しながら、ふしづくりの教育を作り上げることができたのである。

山崎の著書に掲載されている子どもの感想文には、

「研究演奏の時に、どきどきしたけれどたくさんの拍手がもらえて感激した。」「研究授業の時に、知らない先生からとてもすばらしかったと褒められて嬉しかった。」(山崎, pp.165, 171-172, 271-272) というような記述が多くある。また、学校の帰り道に、友だち同士で、歌をつくって、歌詞を考えたり、ピアノを吹いたり、指揮に合わせて歌ったりした話や、家庭に帰って、お母さんにピアノを聞いてもらって褒められた話、お母さんと弟と自分の3人で家族合奏をしてとても楽しかった話などが掲載されている(山崎, pp.167-170)。古川小学校で実際にふしづくりの教育を受けたOBの人たちの間でも、「学校の休み時間に、ずっとリコーダーを吹いたりピアノを吹いたりしていた。学校からの帰り道でもよくリコーダーを吹いていた。」「生活のなかに常に音楽があった。毎日、ピアノや笛を吹いていた。」「自分で作ったふしは、1年生から6年生まで1つ残らず全部覚えている。今でも歌える。」「本当に楽しい音楽の授業だった。」「今のよういじめ問題とかは全くなかった。みんな仲がよかった。」など、たくさんの思い出が語られた²⁴⁾。また「音楽は得意でなかったけれど、最後の方の授業で、自分の作ったふしが初めてグループの曲に選ばれ、その授業のアンコール曲にも選ばれて、最後にみんなで演奏した。本当に嬉しかった。」というエピソードもある。²⁵⁾ ふしを選ばれたことがない子どもを気遣って、グループのメンバーたちがその子のふしを選んだそうである。ふしづくりの教育が、子どもの生活に密着していたこと、子どもたちが本当に音楽を好きだったこと、子どもたちの心が育っていたことなどがよくわかる。

ふしをつくる→リズムを変奏する→合う音(保続音, 和音)・合うふし(副旋律)をつける→合唱奏する、という一連のふしづくりの活動は、かなり高度な内容である。通常であれば、多くの訓練がなされないと達成できない内容である。しかし、古川小学校のふしづくりでは、ほとんどの子どもが簡単にできていた。その理由として、ミュージックサインの多用によって、たくさんの音楽的語彙(ふし)が耳に入っていたこと、先生あるいは子どもが演奏したふしを、即座に模唱奏する習慣が根づいていたために、聴取力、音楽的記憶力、内的聴覚力が育成されていたこと、音楽が生活に密着しており、ふしを聞いたり演奏したりする機会が多く、音楽的情報(音楽)が蓄積されていたこと、などが考えられる。音楽的感觉、聴取力、蓄積された音楽的情報などがなければ、創作活動はできない。何もないところから、音楽は生まれないのである。

最後に、古川小学校でふしづくりの教育が成功した

もっとも大きな原因として、学習意欲の高さが挙げられるであろう。ふしづくりの学習過程でも、教材の学習過程においても、常に子どもが主体となって動き、教師はそばで見守ったり、援助したりするだけである。事例にもあったように、音楽の授業のなかでは常に、自己存在感が感じられ、共感的な人間関係が育成され、多くの自己決定の場があった。これこそ、現在の教育課程のすべての領域において機能することが求められているものである²⁶⁾。

山崎が述べているように、古川小学校におけるふしづくりの教育は、まさに音楽教育の域を超えた人間教育だったのである。

【注及び引用文献】

- 1) 「ふしづくり一本道」とは、古川小学校が研究指定校となった時の研究課題「創造性の開発をめざした『ふしづくり一本道』実践」に由来する名称である。先行研究では「ふしづくり一本道」という文言を用いているものが多いが、本論文では、「」つきの名称以外では、ふしづくりの教育という文言を用いる。なぜならば、中家一郎校長も山崎俊宏音楽主任も、ふしづくりの教育に深く関わった中村好明もふしづくりの教育という文言を用いているからである。
- 2) 山本弘『音楽教育の診断と体質改善—音楽能力表とふしづくりの一本道—』明治図書、1968。
- 3) 河口道朗『音楽教育の理論と歴史』音楽之友社、1991、pp.345-350。
- 4) 木村信之『昭和戦後 音楽教育史』音楽之友社、1993、pp.301-304。
- 5) 澁谷由美「音楽科教育における基礎領域に関する研究—「ふしづくり一本道」を中心として—」兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士論文、1996。
- 6) 八木正一「ふしづくり一本道」『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004、p.676。
- 7) 佐橋晋「「ふしづくり一本道」(古川小学校)の歴史的意義」『戦後音楽教育60年』開成出版、2006、pp.277-288。
- 8) 松永洋介「「ふしづくりの音楽教育」が示す音楽的能力発達研究への視点」『学校音楽教育研究』10、2006、pp.147-148。
- 9) 松永洋介「「ふしづくり一本道」における指導段階表の系統性に関する検討—第1段階から第2段階への移行期を中心に—」『学校音楽教育研究』11、2007、pp.118-119。
- 10) 松永洋介「「ふしづくり」と「音楽づくり」をつ

- なく創造性の系譜について」『学校音楽教育研究』12, 2008, pp.119-120。
- 11) 井上薫「表現の原理によるふしづくりのカリキュラム・プログラム開発—低学年の場合—」『学校音楽教育研究』12, 2008, pp.117-118。
- 12) 菅道子「1969年代における松本民之助の創作指導の提起とその展開」『音楽教育史研究』第11号, 2008, pp.23-37。
- 13) 古川小学校『ふしづくりの教育—主体的で楽しい音楽教育の実現をめざして十年—』明治図書, 1975。
- 14) 三村真弓, 吉富功修, 松永洋介, 中村隆夫, 山崎俊宏「岐阜県におけるふしづくりの音楽教育成立の軌跡」『音楽教育学』第42巻第2号, 2012, pp.72-76。
- 15) 三村真弓, 吉富功修, 中村隆夫, 伊藤真「昭和10年代～20年代の岐阜県高山市における中村好明の音楽教育改善の試み」『音楽学習研究』第8巻, 2012, pp.1-12。
- 16) 三村真弓, 吉富功修, 伊藤真「昭和30年代～50年代の岐阜県飛騨地方における中村好明の音楽教育観の変遷」第9回音楽学習学会・第1回亜州芸術教育学会合同大会（於：茨城大学）発表資料, 2013.8.19。
- 17) 吉富功修, 三村真弓「岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」を支えた中家一郎校長の音楽教育観(1)」『音楽文化教育学研究紀要』XXV, 2013, pp.37-44。
- 18) 三村真弓, 吉富功修「岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」を支えた中家一郎校長の音楽教育観(2)」『音楽文化教育学研究紀要』XXV, 2013, pp.45-52。
- 19) 山崎俊宏『ほんものの音楽教育を求めて』古川小学校, 1973。
- 20) 中日教育賞とは、中日新聞社が、昭和44年に制定した賞で、教育の振興に寄与するため、中部各県の教育の第一線にあって、すぐれた業績をあげた教育者を表彰するものである。
- 21) 前掲書13), pp.182-183, 前掲書14), p.76, 及び前掲書19), pp.5-6からまとめた。
- 22) 前掲書18), p.51。
- 23) 平成24年10月9日に、山崎俊宏氏に行ったインタビュー調査による。
- 24) 平成25年8月3日に、岐阜県高山市国府町のこくふ交流センターで行ったインタビュー調査による。出席者は、古川小学校元教員の山崎俊宏氏と松井瑛子氏、故中家校長長男中家久和氏ご夫妻、古川小学校OB 6名である。
- 25) 平成24年10月9日に、山崎俊宏氏に行ったインタビュー調査のなかで聞いたエピソード。
- 26) 文科省「生徒指導提要」2010, p.5参照。